言語文化学科
ドイツ語フランス語圏
言語文化コース
フランス語圏言語文化領域

フランス語圏言語文化領域ってどんなとこ？

言語・文学・文化の3つを柱にフランス語圏の様々な事象を学ぶ領域です。国際フランス語圏機構には世界80ヶ国・地域が加入していますが、その広がりを視野に入れつつ、より具体的で身近な主題や方法から学ぶことが多いです。たとえば、社会や文化に関する基礎知識をフランス語テキストで学び、さらに文学作品で読解力を鍛える演習、言語や文学の歴史を学ぶ講義など通じて、その背景にある様々な社会のあり方や考え方への理解を深めます。より実地に学ぶためフランスに留学する人もいます。卒論では、みなさんがそれぞれの関心に沿ってフランス語圏の文化や社会事象からテーマを選び、掘り下げられるよう、様々な切り口から言葉と文化に触れ、考える機会を提供しています。

白田先生の研究について

私は、19世紀末のフランスやベルギーの文化について研究しています。たとえば、サラ・ベルナールという女優は、メディアミックスの黎明期であった19世紀に登場し、演劇だけでなく美術や文学に様々な影響を及ぼしました。サラは、ポスター・新聞・写真といったマスメディアの発達や都市空間の形成とともに、その存在が世界に知られていきました。また、同時代の画家や文学者は、サラをモデルとして作品を発表しました。さらに、彼女は、当時の女性蔑視の思潮に従うように見せながら、女性には才能がないと思われていた脚本・彫刻を手がけて、当時の常識を覆していったのです。このように、19世紀の人気女優を通して、メディアとジェンダー表象の関係を考えることができます。また最近では、ドイツ語圏・フランス語圏の先生方と4人でアール・ヌーヴォーの共同研究をはじめたところです。そこで、私は、ヨーロッパ大陸におけるアール・ヌーヴォー発祥の地であるベルギーを研究しています。

准教授
白田 由樹（しらた ゆき）先生

おすすめの映画

『天井桟敷の人々』
（Marcel Carné）

19 世紀の伝説的俳優たちの恋愛をロマンチックに描きながら、実はナチス占領下でフランス文化の抵抗として作られた人気作。

植田さんの学びについて

3 回生
植田 宏紀（うえだ ひろき）さん

—領域に入ったきっかけ

もともと語学に興味があり、ヨーロッパへの憧れをもっていました。そんなとき、テレビでモン・サン＝ミシェルの映像を目にして感動し、とにかくモン・サン＝ミシェルに行きたい一心でこの領域を選択しました。世界の人々の生活に触れたいという思いで、第二希望は地理学を考えていましたが、特にどの地域を研究したいかが定まっていなかったので、文化圏をフランスに絞ったほうが研究しやすいだろうと考え、この領域に決めました。

—領域に入ってからの気づき

最初は語学を勉強したいという思いが強かったです。しかし、移民問題・料理・芸術といった様々な文化を学ぶのがおもしろいと思うようになり、実際にフランスに行ったことで、現地における移民問題の身近さを痛感しました。そして、日常の会話の中で、言葉と国民性の関わりや、「話す・聞く」姿勢の大切さに気づきました。こうした経験を通して、言語に対する価値観ががらりと変わりました。

おすすめの授業
エチュード・フランコフォーヌ

この授業では、フランスだけでなく、フランス語圏と呼ばれる様々な国について学ぶことができます。ベトナムなど一見関係なさそうに見える国がフランスとどのように関係するのか、またどのような共通点があるのか、グループでの発表や、他のグループなどを通じて、その国に対するあらゆるアプローチの仕方を発見していくのがおもしろいですよ。

白田先生にとっての「芸術」

フランスといえば、料理やファッションと並んで芸術をイメージする人は多いと思います。なぜフランスなのか？　それにはこの国が他の追随を許さない文化の国たろうと努めてきた歴史があります。そのため王が他国から優れた芸術家や建築家を呼び寄せたり、宮廷を中心に美の規範を審議するアカデミーを創設したり、大革命後も国が文化産業の振興に力を注ぎ、世界各地から才能ある芸術家たちを引きつける「花の都パリ」を作り出してきたのです。今日でも日本のデザイナーがフランス政府からシュバリエなどの芸術文化勲章をもらったとか、菓子職人がパリのコンクールで入賞したというニュースを聞くことがありますね。フランスの国家的ブランド力の源には、文化大国というアイデンティティと共に、出自にかかわらず独創的な芸術家や職人を尊重する伝統があります。何だかいいことばかりで嘘くさい（？）ですが、もちろん光も影もあるのが現実です。その裏話は授業でぜひ！

卒業論文 タイトル紹介

○メディアが日本人女性に発信する CHANEL のブランド・イメージ —— 雑誌とウェブサイトに表象される “マドモアゼル・シャネル” 像から ——
○フランスにおける日本の料理の受容について —— *Le Monde* 記事の分析を通して ——
○フランス旧植民地マルティニークにおける政治と文学の構造

言語文化学科
言語応用コース

言語応用コースってどんなとこ？

本コースの所属教員は全員、言語学の専門家です。4人が担当する言語学の分野は、多岐に渡り、言語構造論、言語意味論、言語運用論、言語獲得論、言語教育論、言語比較論、心理言語学、神経言語学などで、言語学の領域をほとんどカバーしています。

本コースの特徴は、所属教員によるきめ細かな卒論指導にあります。2年生と3年生のときに専門科目を履修しながら、同時に、3年生から卒論のテーマ選びを始めます。言語応用というコースの名前通り、言語に関係するテーマであれば、インターネット、マンガ、小説など、どんな題材を扱っても構いません。3年生の後期から4年生の前期にかけて、テーマを絞り込みながら卒論を完成させていきます。

井狩先生の研究について

教授
井狩 幸男（いかり ゆきお）先生

神経言語学と心理言語学が融合した領域の神経心理言語学が私の研究分野です。最初は、心理言語学の中でも特に言語習得に興味を持ち、赤ちゃんが母語として英語を習得する仕組みや、日本人の第二言語として英語を学習する際にどのように応用できるかということを調べていました。しばらくして、心理言語学のアプローチではうまく説明できないことが結構多いことに気づき、脳内で言語がどう処理されているのか調べなければ、自分の抱く疑問に納得のいく答えが得られないという考えに至り、神経言語学の分野へと関心が移っていきました。この分野では、たとえば、文法について、文法書に書かれた言葉が脳に記憶されているのでなく、コンピュータのように0と1で書き込まれた情報だと捉えます。最近は、脳科学から得られる知見をもとに、言語に関する様々な現象を考察しています。

おすすめの本

山鳥重『「わかる」とはどういうことか——認識の脳科学』（ちくま新書）

臨床医で神経心理学者の山鳥先生が一般読者のために書かれた一冊。日常生活で我々の経験する気づきについてわかりやすく説明されている。

乾さんの学びについて

3 回生
乾 亜希穂（いぬい あきほ）さん

—コースに入ったきっかけ

人間関係に興味があり、コミュニケーションについて調べたいと考えていました。そして、人にとってのコミュニケーションにおいては、言葉が非常に重要であるはずだと思い至り、言語によるコミュニケーションを研究したいと思うようになりました。心理学コースや国文学コースとも迷いましたが、自分の研究したいコミュニケーションを中心にあつかうならこのコースだと思い、選択しました。

—コースに入ってからの気づき

想像以上に様々な研究をできるということが、大きな気づきでした。たとえば、音韻論のようないかにも言語応用らしい分野もありますが、「合唱曲のパート分け」や「笑いのメカニズム」といった、歌詞や台詞と絡めたユニークな研究をするひともいます。直接には言語とかかわりがないようにみえる事柄でも、言語応用的な視点でみると、おもしろい発見があります。そんな中で、私はコースに入ってから、文化や状況による言葉の使い分け方に興味を持つようになりました。

おすすめの授業
言語比較論演習

言語比較論演習がおすすめです。毎年、テーマや担当教員が変わるので、一概には言えませんが、主に日本語と英語を比較し、それぞれの特徴をとらえるという内容になっていると思います。私が受けたときの授業（田中先生）では、状況重視型の日本語と人間重視型の英語、「こと」的発想の日本語と「もの」的発想の英語、などから日本語らしさ・英語らしさを考察しました。一番言語応用コースらしい授業だと私は感じました。

井狩先生にとっての「芸術」

芸術の中で言語応用と一番関係が深いのは、音楽である。音楽と言語の関係については、それほど多くの研究があるわけではない。その中で興味深いのは、音楽家ラベルに関する考察である。彼は、晩年にほとんど言葉を失いながら、ボレロを完成させたことが知られている。ヒトは進化の過程で、言語を獲得する前に音楽の技能を修得した可能性が示唆される。次に、絵画を取り上げる。素人は、絵画を見たときに右脳が反応する。画家では、右脳だけでなく、左脳も活性化する。右脳は全体的処理に、左脳は分析的処理に向いている。音楽でも同様のことが言える。素人は右脳が、音楽家は左脳も活性化する。さて、言語はどうか。一般言語は左脳が反応する。手話では右脳の活性化が認められる。ラベルがボレロを作曲できたのは、左脳に代わって、右脳を最大限活用した可能性が高い。ヒトは進化の過程で、言語を獲得しながら左脳を発達させてきた。その結果、芸術の後から論理世界が誕生した。

卒業論文 タイトル紹介

○広告コピーにおけるカタカナ
○マンガ翻訳に見る日英語における物事の捉え方の差異
○「方言がうつる」ということについて